

齊藤茂吉全集

第十九卷

藤茂吉全集

第十九卷

第五回配本（全三十六卷）

齋藤茂吉全集 第十九卷

定價 千四百圓

昭和四十八年五月十四日 發行

著 者 齋 藤 茂 吉

發行者 岩 波 雄 二 郎

發行所 株式會社 岩 波 書 店
東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・亂丁本はお取替いたします

源實朝

目次

源實朝

源實朝

一 既往の實朝觀	三
二 實朝の誕生並頼家の誕生	五
三 實朝の最後	八
四 頼朝・政子・大姫・頼家の性格	一〇
五 實朝の人物・性質	一三
六 實朝の人物・性質。實朝御臺所	一七
七 實朝の容貌。健康狀態	一九
八 實朝の歌人としての略歴	二一
九—一六 實朝の歌選釋。附、本歌取。實朝の本歌取	二七

一七 實朝が萬葉調の歌を詠むに至つた誘因……………三八

一八 歌人の實朝觀と歴史家の實朝觀……………三九

一九 思想的和歌と實朝……………四〇

二〇 實朝歌風の變遷。結語……………四三

金槐集研究……………四六

一 金槐集解説。金槐集刊本。金槐集眞淵書入本。金槐集註釋書……………四六

二 實朝の略歴。實朝の歌人としての略歴……………四八

三 金槐集の歌數。初期の歌。中期の歌。晩期の歌。實朝歌風の概觀……………五三

四 實朝が萬葉調の歌を詠むに至つた誘因……………六一

五 實朝の歌選釋……………六五

六 實朝の京都憧憬。實朝周圍の歌人並其歌風。新和歌集……………六七

源實朝……………九六

一 源實朝。金槐集諸寫本解説。金槐集刊本書目及解説。金槐集註釋

書目及解説。文獻補遺……………九六

二 金槐集の歌數計算。定家所傳本。貞享本。類從本。宮内省圖書寮

本。内閣本二種。夫木和歌抄。現在知られたる實朝の歌總數。勅

撰集に選ばれたる總數	101
三 夫木和歌抄所載のうち金槐集になき實朝の歌。武田博士報告の實朝の歌三首。東鑑所載の歌一首	107
四 實朝の作歌初期。新古今集。古今集。藤原定家との接觸。詠歌口傳と實朝の歌。和歌三代集。定家相傳の萬葉集	111
五 建曆三年十一月二十三日定家相傳私本萬葉集を實朝に贈る。佐佐木博士の定家本金槐集の發見。萬葉集と實朝との關係につき佐佐木博士の説。それに對する齋藤茂吉の説。建曆元年誤寫説の滅亡	118
六 勅撰集の萬葉歌人の歌を経て其影響を受けたる實朝の歌。拾遺集と金槐集。新古今の萬葉歌人。萬葉集と金槐集。建曆三年十一月二十三日以後の二十日間	123
七 貞享本・類從本・圖書寮本・内閣本等の字句の異同が定家本によつて決定せらるべき實例	136
八 定家本奥書の意義。定家本以後の實朝の歌。建保元年以後和歌會ありし證據。實朝の本歌取の歌の一特質。實朝の歌調。結語	140
奥義抄其他と金槐集	144

後鳥羽院と源實朝と	二〇六
『おれおれ』未練の記	二二一
東撰和歌六帖	二三五
六孫王神社藏實朝詠草	二四一
實朝作歌實數	二四三
「綺語抄」寸言	二四五
『あはれなるかなや』	二五〇
『二心わがあらめやも』に就て	二五二
定家所贈の萬葉集と實朝	二六三
果して新古今風に墮したか	二六八
實朝の歌七十首講	二九一
金槐集の發育史的調査	
新古今集と金槐集	三八一
古今集と金槐集	四三九

萬葉集と金槐集	四九一
---------	-----

定家・家隆・千五百番歌合・其他	五二九
-----------------	-----

金槐集の傳本

金槐集の傳本	五四九
--------	-----

第一 定家所傳本	五四九
----------	-----

第二 群書類従本系統	五五四
------------	-----

第三 貞享本系統	五六一
----------	-----

實朝雜纂

實朝の肖像	五八三
-------	-----

實朝關係の社寺等	五八五
----------	-----

實朝御臺所	六〇三
-------	-----

實朝の性格	六〇九
-------	-----

實朝文獻補遺	六二二
--------	-----

源實朝年譜	六二七
-------	-----

後記	六六一
----	-----

後記	六六九
----	-----

源實朝

源實朝

○

賀茂眞淵は、初心者のために書いた新學の中で、『奈良の朝までの人の心の高きを思へ。鎌倉の大まうち君の歌をもむかへ見よ。……鎌倉の大まうち君の歌は、今の京この方の一人なり』云々とかう書いてゐる。すなはち、歌を學ぶ者の手本となるべきものは、萬葉集の歌である。それから實朝の歌をもよく讀むといい。實朝は平安朝以後の第一人者だといふのである。然るに、香川景樹は新學異見のなかで、『鎌倉の右府の歌は志氣ある人決えて見るべきものにあらず。……右府の歌の如く盡く古調を踏襲め、古言を割裂たらんには』云々と云つて居る。

ひとりの歌人、實朝の歌の如きものに關する評價がすでに斯のやうに違つてゐる。眞淵よりも後に生れた景樹は、眞淵の系統をひいた江戸派歌人にむかつて一爲事をしようとして、先づ眞淵の新學に對つて異を樹てた。それであるから景樹は實朝の歌を一々吟味したと云はうよりも眞淵の言葉に對する反感が先に立つてゐたと看るべきであらう。それでも景樹は年老いるにつれて、萬葉の註釋を書いたり、萬葉調を取入れたり、さういふことは、こそこそとやつてゐた。

明治になつて、正岡子規が景樹の言葉を評してかういつた。『自己の歌が盡く古今集以下を踏襲剽竊したる事を棚へあげて、却て創意多き實朝の歌を傷けんとは憎さも憎き振舞かな。泥棒が人に對して泥棒よばりするさへ片腹痛きに、況して高潔清淨なる實朝の如きを捕へて泥棒に落さんとす。盜人たけだけしとは景樹の事なり』。その後、子規の言葉に對して、こそこそと云ふものがあつても、いまだ力強い駁撃の文章に逢著したことがない。

『近ごろ實朝のことを、新らしく論じたものがありませんか』。『一向知らずにゐます。新らしくとはどういふ意味ですか』。『つまり新らしい頭、新らしい看方ぐらゐの意味でせうか』。『成程。そいつはむづかしいでせう。つまり征夷大將軍としての實朝を論ずるといふのでせう。さういふことは、達者な社會科學者なんかなら何とか説は立てませう』。『歌からは説が出ませんか』。『出ないとおもひます。歌の評価は、そんなにぐらぐらするものではないのです』。『併し、新しい文學觀がありますから、新しい和歌觀もありませう』。『私も一二聽かされたが、皆つまらなかつた。何だか眞似でしたね。成程、さうして見ると、實朝などは我儘で獨創のところがありましたね』。

『その點を一二聽かせませんか』。『いやもう私は實朝のことは前に書いたこともあるし、今いふと二番煎じ、三番煎じになりはしませんか』。『さうならないやうになさるのが、新しい感激でせう。藝術家に對する評價は、不斷のさういふ新感激に本づいたものでなければなりません』。『さうですか。まあ、前人では、賀茂の眞淵はこんなことを云つてゐます。それに對して云つたの

が景樹の新學異見の言葉です。今なら、實朝は『將軍』だから、旦那藝、殿樣藝ぐらゐより下等だなどといひ勝でせう。それも實朝のものを讀みもしない癖にです。さういふ西洋眞似の説は駄目だ』。

そのうち一人になつて私は部屋の中にゐたが、友のいつたことが私に、暗指でもかけたやうに頭のなかにこびりついてゐるやうでもある。

○

實朝は、建久三年八月九日に生れた。頼朝四十六歲。政子三十六歲の時である。吾妻鏡に、『九日。己酉。天晴風靜。早旦以後。御臺所御產氣。御加持、宮法眼。驗者、義慶坊。大學坊等。鶴岳。相模國神社佛寺奉_ニ神馬_一。被_レ修_ニ誦經_一……已_レ尅。男子御產也。……次_テ阿野上總妻室（阿波局）爲_ニ御乳付_一參上。女房大貳局。上野局。下總局等。可_レ爲_ニ御介惜_一也。次有_ニ御名定_一千萬君云々』。吾妻鏡の文章を見ると、當時の有様が随分細かく記載してあり、將軍家御臺所の御產だといふのでなかなか大袈裟なことをしてゐる。神社佛閣に安産の祈願をしてゐるばかりでなく、産所の儀式もなかなか凝つたものであつた。

十日には若君二夜事があり、十一日に三夜事があり、十二日には四夜事があり、十三日には五夜事があり、十四日には六夜事があり、十五日には七夜事があり、それぞれの人物をして沙汰せしめてゐる。七夜事の時は、吾妻鏡に、『今夜若公七夜事。小山左衛門尉沙汰之。將軍家并若公御

方皆獻御馬御劍等。御臺所御方進綾廿段生衣三領、女房中長絹百疋云々」とある。

十月十九日には、政子は孩兒の實朝（千幡）を連れて産所から幕府に歸つてゐる。十一月五日は御行始を行つてゐる。吾妻鏡に『五日。甲戌。卯尅。新誕若公御行始也。入御藤九郎盛長甘繩家。被_レ用_二御輿_一。女房大貳局。阿波局等。奉_レ扶_二持_一之」とある。廿九日には五十日百日の儀式があつた。『新誕若君五十日百日儀也。北條殿沙汰之。女房不_レ候_二陪膳_一。江間殿令_レ從_レ之給。被_レ進_二御贈物_一。御劍沙金鷲羽也云々』といふ記事がある。

十二月五日の吾妻鏡には、『將軍家自奉_レ懷_二新誕若公_一出御。此嬰兒鍾愛殊甚。各一_レ意而可_レ令_レ守_二護將來_一之由。被_レ盡_二懇勸御詞_一。剩給_二盃酒_一。女房大貳局（近衛局）。取_レ杓持_二盃云々。仍面々奉_レ懷_二若公_一。獻_二御引出物_一（各腰刀云々）。申_二謹承之由_一云々』とある。此處の文章を讀むと頼朝の面目も躍如として居り、頼朝がすでに初老を過ぎ、多くの人生上の難關を切りぬけて來た今、計らず男の子をまうけて嬉しいといふところが誠によく出て居る。頼朝が多勢の家來を前に置き、一面には儀容を損じないやうに努めながら、嬉しくて溜まらんといい面持をしたところであつて、かういふ戲曲的な場面であるから、文章の『此嬰兒鍾愛殊甚』といふ一句は實に千鈞の力を持つて居り、及び難い技巧であるとおもふ。吾妻鏡の文章は妙な漢文で私には能く讀めないところが澤山にある。併しひろひ讀するに際してもたまたま如是の句に出逢ふのであつて、平安朝和文の流麗で柔かいものから、かういふ文體に移つて讀み味へると、そこに鎌倉期の文學の何かを暗指

してゐることを思はねばならぬ。特に實朝の和歌を鑑賞するに當つて、何かの目安となるに相違ない。

實朝の誕生はかくの如くであつた。併し頼家誕生の時も相當の儀容があつたので、これも吾妻鏡にはなかなか細かく書かれてゐる。壽永元年八月十一日の條に、『己酉。及_レ晚御臺所有_二御產氣_一。武衛渡御。諸人群集。又依_二此御事_一。在國御家人等。近日多以參上。爲_二御祈禱_一。被_レ立_二奉幣_一。御使於伊豆宮根兩所權現并近國宮社』といふのであるから、やはり實朝の時と略同様である。ところが同じ年の七月十二日の條に、『庚辰。御臺所依_二御產氣_一渡_二御比企谷殿_一。被_レ用_二御輿_一。是兼日。被_レ點_二其所_一云々。千葉小太郎胤正。同六郎胤頼。梶原源太景季等候_二御共_一。梶原平三景時。可_レ奉_二行御產間雜事_一之旨。被_二仰付_一云々』とあるのは、産の約一月ばかり前に陣痛に似た證があつて、一時は産があるのではなからうかと云つて諸人が氣色立つたところである。

八月十二日に頼家が生れた。『庚戌。霽。酉尅。御臺所男子（頼家）御平産。御驗者専光房阿闍梨良暹。大法師觀修。鳴弦役。師岳兵衛尉重經。大庭平太景義。多多良權守貞義也。上總權介廣常引目役。戌尅。河越太郎重頼妻（比企尼女）依_レ召參入。候_二御乳付_一』といふやうなことも書いてある。

私は實朝のことを書かうと思つて、ここに計らず頼家のことを挿入した。頼家は實朝の兄であるから、そこに何かの共通點があるとおもふのである。頼家は富士の卷狩に頼朝に連れられて行